

STORY 4
中部逸品物語
 CHUBU IPPIN STORY
 世界に誇るべき隠れた名品を発掘

駿河塗下駄

技を磨き続けること60余年
 生涯を賭した職人が描く芸術品



静岡県郷土工芸品にも指定されている駿河塗下駄

下駄職人・本間久次郎の発案で 明治時代に誕生した駿河塗下駄

江戸時代、東海道の中心だった静岡では、各地の流行が伝わり、さまざまな履物が作られていた。駿河塗下駄は、1887年(明治20年)、家業を継いだ下駄職人の本間久次郎が、当時安価な消耗品に過ぎなかった単調な下駄づくりに疑問を持ち、試行錯誤の末、漆塗りを施した高級塗下駄を開発したのが始まりである。これを東京に出荷したところ好評を博したことから、地元で豊富に入手できた安倍杉材を用いて量産化。現在の清水銀座通りにあった下駄問屋「三島屋」に納入して出荷を開始するとたちまち全国的な流行となり、特に漆や蒔絵で絵柄を施した女性用の下駄が大ヒットした。

最盛期を迎えた大正時代には 全国の履物市場を席巻するまでに

1897年(明治30年)以降、駿河塗下駄は、木地職、漆塗師、蒔絵師など、各工程を職人が分業するようになった。さらに1912年(明治45年)には、三島屋二代目の井上半蔵が、清水区築地町に「清江下駄株式会社」を創立。機械化による大量生産が開始されると、瞬く間に日本全国の履物市場を席巻した。大正時代には最盛期を迎え、輸出用の漆器から転換した職人たちにより、さらなる創意工夫がなされ、「塗下駄と言えば静岡」と言われるほどの発展を遂げたのである。こうして静岡で育まれた塗下駄の伝統は、下駄を履く機会が減少した今も職人たちの手で大切に受け継がれている。

【糸春雨の下駄ができるまで】



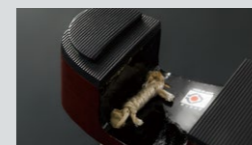
四国などで加工された国産桐の木地に下地塗りを行う



下地を塗り終えた後、凹凸ができた表面を丁寧に磨く



全体を黒塗りした後、赤く上塗りし、刷毛で模様をつける



下駄底のスポンジを取り付ける。かかと部分は取替可能



下駄底の仕上がりを確認し、鼻緒を取り付けて完成



卵の殻を使ってウサギの絵柄を描いた卵殻塗の下駄



本漆を使って丹念に絵柄を描いた駿河八雲塗の下駄

三代目の塗下駄職人・片桐さんは 筆1本で幻想的な絵柄を生み出す

駿河塗下駄の特徴は、漆塗り、蒔絵などで施される艶やかな色彩とデザインだ。この装飾技法は、駿河漆器の「変わり塗り」の技術が下地になっている。静岡浅間神社の社殿造営で根付いた漆の技術を応用したものである。第一次世界大戦の影響で駿河漆器の輸出が滞り、多くの漆器職人が塗下駄づくりに転職したのがきっかけで、さまざまな漆の技術が塗下駄に取り入れられた。

現在、駿河塗下駄の職人はわずか3名。そのうちの一人、片桐雅夫さんは16歳でこの道に入った。祖父の代からの伝統を受け継ぎ、73歳の今も第一線で活躍している。絵画のような優美な世界を筆1本で下駄に描き出すのが片桐さんの真骨頂。漆を使って丹念に描かれた下駄は、その美しさに思わず目を奪われるはずだ。

片桐さんの祖父は、針箱や小物家具などを幅広く手掛ける木工職人だった。明治時代から下駄を製作し、塗下駄が脚光を浴びるようになった大正時代以降は、片桐さんの父が塗下駄専門の職人として名を馳せた。片桐さんも物心つく前から下駄づくりに触れ、「職人の道に進むのは自然の流れだった」と振り返る。

工房で作業すること1日10時間 73歳の今も作品を生み出し続ける

16歳で家業に入るも、10年ほどは下積みが続いた。見よう見まねで仕事を覚え、一人前になれたのは30歳頃のことだという。親であってもライバル。展示会で上位に入賞し、父から嫉妬を受けたことも。互いに切磋琢磨し、さらなる高みを目指して技術を磨いてきた。

現在は、耐久性や作業性に優れたカシュー塗料で作られることが多い駿河塗下駄。片桐さんが手掛けるカシュー塗りの糸春雨などが人気を集めるが、やはり本漆塗りで作られる一点モノの作品は格別の趣がある。伝統の漆の技法を用いた「駿河八雲塗」や、卵の殻を用いて絵柄を施した「卵殻塗」は、まさに芸術作品だ。黒の漆塗りだけで36工程。模様を付けるならさらに倍以上の工程がかかる。完成までに数カ月を要するという。

作業は1日10時間。正月三が日以外は、工房に籠って作品づくりに精を出す。それでも「好きだから大変と思ったことは一度もない」という。好きな絵柄を見つけては、作品に活かせないかと考える。73歳を迎えても衰えぬ向上心。「これがなくなったら終わる時ですから」と微笑む片桐さんは、今日も新たな作品に魂を込める。

【駿河塗下駄 問い合わせ先】 静岡市駿河区新川一丁目15-5 片桐 雅夫 tel:054-284-8255

駿河塗下駄
 静岡県・静岡市

祖父の代から続く駿河塗下駄職人の三代目として、16歳から修業を重ね、百年以上続く伝統の技を今に伝えている。半世紀以上磨き上げてきた匠の技術は多方面から高く評価され、2019年(令和元年)には静岡県の優秀技能賞を受賞。東京の百貨店をはじめ各地の展示会で販売を行うほか、口コミによる問い合わせにも対応している。